

インターネットを利用した英語教育の可能性

加藤 鋤 三

0. 主張

ウェブサイト毎週コンテンツをあげていく形態の授業はあまりに教員の負担が大きくなりすぎるため、半期または通年そのような授業を続けるというプランは現実的ではない。しかも全ての英語教官がそれに必要な技術を持っているわけではない。しかしメールだけでも、市販の教科書と併用すれば、教養英語の遠隔授業は十分可能である。しかもメールならば特別な技術は必要なく、現実的な体制を立てることができる。隔地学部の再履修生用にすぐにも本格実施すべきである。

1. 背景

信州大学は典型的な分散キャンパスを、それもいくつもの隔地学部を持つ大学である。一年次は全学部の学生が松本キャンパスに集められ、そこで共通教育を中心に受講し、二年次以降はそれぞれの所属する学部のあるキャンパスに散っていく。このような体制にあるため、一年次で共通教育科目を落とした学生にどのように再履修させるかが大きな問題である。従来は、再履修生は実際に授業に出なくても試験だけを受けることができる、という「再試験制度」があった。しかしこれは当然のように問題視され、平成11年度から再試験制度が廃止された。つまり、再履修生は実際に授業に出なければならなくなったのである。この制度改編は、建前から言えば至極当然の措置であるが、隔地学部の再履修生にとってみれば、少数の科目のためだけに毎週松本キャンパスに来なければならない、というのは不都合この上ないことである。

一方教師側からすれば、このような体制下では、隔地学部の一年次生を落とすのは忍びない、という心理がどうしても働いてしまうのは人情というものであろう。これは大学審議会答申で打ち出された、「厳格な成績評価」の達成の大きな障害となりかねない。

このように、現状では隔地学部の学生にとってもまた教師にとっても、共通教育の再履修は大きな問題である。これを一挙に解決するには、学生が実際にキャンパスに来なくても再履修できるという授業を整備するか、それともキャンパス統合をするか、の二つしかない。後者が現実的な方策でない以上、「共通教育の再履修は遠隔教育で」というのはすぐにも実施しなければならない課題である。更に「厳格な成績評価」の実施に向けての一助となる。

また、遠隔教育は、再履修用だけでなく、高年次教養科目としても整備すべきである。平成10年度に行われた人文学部の外部評価では、「教養を終えてから専門に」というシステムの不備が指摘された。専門の授業を受けていると、その時初めて必要を感じる教養教育というものは必ずあるはずである。教養教育を実質上一年次に限っているため、教養は専門の前座という意識を学生が持つのは避けられない。そのような意識をもって受ける授業であれば、

学生が単位取得のためだけに受講するという態度になるのは致し方ないことであろう。ここで問題なのは、一年次では学生は教養教育の必要性を感じない、という点にある。しかし専門教育を受け始めると、例えば英語で書かれた文献を読む力の必要性を必ず感じるはずである。教養教育は、そのように受講する本人がその必要性を感じるときに受講できるシステムに変えるべきである、というのがその指摘の趣旨であり、まことにもっともな提案である。しかし信州大学のような分散型キャンパスでは、このような高年次教養教育は、先ほどの再履修の場合と同じ理由で不可能に近い。それを可能にするには、遠隔教育の本格実施以外にはないであろう。

以上、本節では、分散型キャンパスを持つ信州大学では

- ・ 隔地学部所属の再履修生問題
- ・ 「厳格な成績評価」の実施
- ・ 高年次教養教育の展開

この三つの課題を解決するには、遠隔授業の本格実施しかない、という主張をした。

2. 提案

それでは遠隔授業をどのように実施すべきか。信州大学はテレビ会議型の通信システムSUNSを持つが、それはもちろん限られた数の授業でしか使えないし、また時間選択の幅も当然狭い。

次に考えられるのはインターネットを利用した授業である。さて、もしウェブサイトを使っている遠隔授業を考えるとしたら、少なくとも筆者には非現実的である。その理由は、例えば英語の授業で毎回毎回の教材をウェブサイトに掲載する、というのは余りに労力を食うことが分かっているからである。筆者は共通教育では英語を教えている。もし英語の授業を数コマ教えるだけでよい、というのなら、むしろそのくらいの労力は当然支払うべきものである。しかし我々教師は他にも各種専門の授業や学部運営の仕事、更に学会運営の仕事もあり、それらに追い立てられているという現実がある。その上にももちろん研究がある。そのため、少なくとも筆者には、毎回の授業の教材をウェブサイトへ上げ続けるというのは不可能である。そしてこれは筆者だけに限られる話ではない。

更に、ウェブサイトを自分で運営していくには、教育力以外にも、コンピューターとネットワークに関するある程度の知識・技術力が不可欠である。つまり、誰にでもできる授業形態ではない、ということである。

しかし、もし遠隔授業でも、通常の教室で行う授業のように、受講生と教員が同じ教科書を持っているとしたら、後はメールによる指示・解説・添削・質疑応答で十分授業は成り立つ。英語で言えば、英作文の授業は、教科書さえ使えばメールだけで十分である。これが本稿の主張である。更に、ウェブサイト運営と違って、メールだけならネットワークに関する知識は余り必要ない。つまり、誰にでも出来る授業形態である。

この主張は筆者の体験にもとづくものである。次節では、そのようなメールを使った遠隔授業の実践レポートである。

3. 実践レポート

3.1 英語ラボラトリー実習

この授業は信州大学人文学部で筆者がしているもので、4年の実績がある。使うものはメールのみである。内容は、英語でのディベート、学生による学生の英文添削、学生による添削の教師による添削、の三つである。下は添削の添削の例である。一行目の引用マーク付きの行は学生Aの英文、二行目は学生Bが学生Aの英文を添削する「添削行」、三行目の円マーク付きの行は教師のコメント行である。

>[By this time] [Atomic Power Plant is an important source
 削除 atomic power has already become to be important
 ¥添削行、「～するようになる」の become to do 不可。

3.2 「英作文」

これは今年度から筆者の非常勤先でしている授業である。コンピューター教室で、市販の英作文用の教科書を使って授業をした。学生は作った英文をメールで教師に提出し、教師はそれをチェックし返送する。学生は必要な部分を直して再度教師にメールする。学生の提出は授業中でなくとも、いつでも提出できることとした。下はその一例である。

>> 3. I think that she [read] a book. 「彼女は本を読んでいたと思う」
 > 進行形
 > I think that she is reading a book.
 時制

この授業は、実際には（コンピューター）教室での授業であったが、遠隔授業の実験としてやってみたものであった。市販の教科書を使って、教師も学生もそれを見ながらメールで授業を進めるというのは、実際特に苦しいことはなかった。しかしもし遠隔授業で、しかも教科書を使わないで、毎回毎回ウェブサイト授業用のコンテンツをあげ、そのコンテンツだけで授業をする、という授業形態であれば、「多大な努力、教師のやる気、ある程度特殊な技術」という3点セットを必要とするであろう。2、3回の授業ならもちろんできるが、毎週15回はきつすぎる。さて、遠隔教育を制度化するには、「多大な努力、教師のやる気、ある程度特殊な技術」を必要とするものは事実上不可能である。ある程度「だれでもできる」という形態を開発しておかなければならない。その点、このような市販の教科書とメールを使う授業なら、英語教師なら「だれでもできる」ものであろう。急いで付け加えておけば、筆者のコンピューターとネットワークに関する知識は危ういものである。例えば筆者はTelnetというものとはまともに使ったことはない。その程度でも、上記のような形態の授業ならば、遠隔教育でも特に困ることはなかった。

3.2 なぜ英作文か？

英語の4技能のうち、readingとlisteningは修行法さえ教えておけば指導者はいらぬ。自分でできるからである。（というより、自分でやらなければできない。むしろ、授業でできるようになるものとは考えない方がいいと言えるかもしれない。）一方、speakingと

writing は指導者が必要である。speaking は相手が必要だし、writing は自分の書いた英文を直してくれる相手が必要である。つまりこの二つは授業でできるようにできるものである。その後者二つのうち、speaking をインターネットで指導するのは、現状では現実的ではない。その点、英作文ならばメールだけでできる。現に、筆者は上記の二例のように実施しているのであるから。

4. 利点

上記のような、市販教科書を使ったメールだけによる遠隔授業の利点は次のものをあげることができる。

- ・メールのみであるため、テレビ会議システム等の大げさなインフラが不要であり、かつウェブサイトを立て維持するようなある程度特殊な技術も不要

テレビ会議システム SUNS に関する事情については既に述べた。ここでは後段について少々述べておきたい。筆者の所属する人文学部では、コンピューターに関する知識に関して次の三つのカテゴリーに分けることができる。

- 1) メールも使えない
- 2) メールは使えるが、ファイルを添付する／受ける段になると少々あやしくなる
- 3) 添付ファイルはおろか、ウェブサイトの維持管理も平気

筆者の体感では、わが人文学部の教官の多数派は2)に属し、1)に属する教官も決して珍しくはない。これは「文系」の極致である人文学部である、という事情があると思われるが、この文脈で大切なことは、今問題にしている英語の教官の典型的な所属学部は「文系」学部であると言うことである。上ではウェブサイトの立ち上げ・維持を「ある程度特殊な技術」という言い方で表してきたが、それはこのような事情によるのである。インターネットを利用した遠隔講義を制度化するには、せいぜいがメールまでと考える理由はここにある。なお、筆者は2)と3)の中間に属する。

- ・学生がコンピューターに親しまざるを得ない

筆者の経験では、受講した学生は実際一応使えるようになる。筆者の演習等の授業では手書きのレポートは受け付けないが、出席者は二年次で必ずこのクラスを受講するようにしてあるため、手書き不可でも問題ない。3.1で紹介した「英語ラボ」のシラバスでは、「英語もコンピューターも必須の社会になっている。英語もコンピューターも『習うより慣れる』である。この授業では両方一度にできるようにするのが狙いである」とうたっているが、この目標は一応果たしているようである。

- ・一度書いたことは再利用可能

英作文の授業で赤ペンと黒板を使うものでは、しっかり記録しておかない限り、せっかく苦

労した添削も学生に返してしまえば教師の手元には残らない。しかしメールを使用する授業形態を取れば、何もしなくても記録は自動的にどんどん貯まっていく。その記録は将来のための重要な資産となることは言うまでもない。

- ・学生・教師とも時間拘束なし
- ・市販の教科書利用で教師の負担減が大

これらの二点についての説明はもはや必要ないであろう。

5. 反省点

上の二つの授業では、いずれも最初の授業でメールソフトの使い方を説明はした。そしてまがりなりにも学生は一応はメールを使えるようになった。しかしコピー&ペーストのような初歩的なワザを教えていなかったため、学生が無用の努力を重ねていたり、また日本語入力に関する基礎知識を与えなかったため、最初は英文を全角アルファベットで送ってくる、ということも珍しくなかった。このようなことを避けるためには、コンピューター実習のような授業を先に受講するようにするか、または最初の数回はコンピューターに関する基礎知識講座とする必要があるだろう。今回のような「擬似遠隔授業」では後者も可能であるが、遠隔授業の本格実施を考えるならば、この点が案外障害となってくるかもしれない。「遠隔授業を受講するからにはコンピューターくらい普通に使えるはずである」と考えることもできるが、そのような態度ではせっきくの遠隔授業も「文系」の受講生にとっては敷居の高いものになってしまう可能性もないわけではない。これは大きく言えば「コンピューターリテラシーの度合いによる二極分化」につながる問題である。大学も積極的な市場開拓に乗り出さなければならない時代である。社会に開かれた遠隔授業を考えるには、受講生の「初期設定」の問題もセットで考えるべきであろう。

また、学内でのみ遠隔授業を考える場合でも、受講生が日常的にインターネットにアクセスできる環境になれば話にならないことは言うまでもなからう。

6. 結論

本稿では、筆者の実験的授業の経験を紹介し、次の提案をした。

- ・メールと市販教科書のセットであれば、少なくとも教養英語であれば遠隔授業は誰にでも可能である。
- ・特に再履修クラスの遠隔授業はすぐにも実施すべきである。
- ・高年次教養教育は、信州大学のキャンパス事情では遠隔授業が一番現実的である。